私の「社会学調査演習 sf」

黒　木　雅　子

社会調査との出会い

私にとってはじめての自覚的な社会調査は，80年代初めカリフォルニアの大学院で行った日系アメリカ人(一世〜三世)と在米日本人を対象にした社会調査である(黒木 1986)。日本の大学で行った社会調査はあまり覚えていないからだ。カリフォルニア湾東地域で生活して4年，知り合いの日系アメリカ人や友人を通じて，インフォーマント(調査対象者)個人および団体にコンタクトをとった。接触した団体のひとつに高齢者を対象にした湾東日系社会奉仕団(East Bay Japanese for Action)がある。結局そこで調査は行わなかったものの，当時書きかけた契約書は色あせても大切に保管している。契約書(Agreement)のはじめには，以下のように明記されている。

> 高齢者クライエントが単なる研究テーマとなり，EBJA が便利なインフォーマント貯蔵庫とされるのを防ぐため，外部の研究者や学生たちには，この契約書を書き，コミュニティから情報を取り出す恩恵と引き換えに高齢者への労働サービス提供という公平な交換が，求められる。

契約書のなかには，その他に調査者名と住所，大学名と指導教官名，論文名と配達日，さらにボランティアできる日数と時間，署名欄がある。さすが契約社会のアメリカだと思った記憶がある。ちなみに日本の社会学会

で倫理綱領が制定されたのは，2005年である。

あれから20年以上がたち，社会調査を指導する立場にいる私は，この契約書を見るたびに身が引き締まる思いがする。調査対象者が誰であれ，相手の善意を前提にして行う調査が情報の搾取に陥らないように，注意してしすぎることはないからである[(1)]。演習のなかで調査の倫理的問題を扱う時は，この契約書のコピーを配布して学生に説明するが，難しさも感じている。しかし私は，学部の学生であっても，最初の調査でこのような倫理的問題に触れておくことは重要だと考えている(川橋，黒木 2004)。

その前に，対面の聞き取り調査で(personal interview)で得た自前のデータで，学生たちは何が語れるだろうか。調査のテーマを身近なものにし，調査の設計，実施，データ分析，報告書執筆と全行程を学生が行うことによって，自覚的な関わりを促そうとしてきたが，うまくいかなかったケースもある。なかには半期でドロップアウトする学生もいた。しかし私にとっては，毎年学生が変わるたびに発見や学びがあるチャレンジングな授業の一つである。

社会学調査演習の教室で

人間文化学部で２年生を対象にした社会学調査演習が始まったのは，学部開設５年目の2004年である。その後この演習は，社会調査士資格をとるために必要な科目の一つとなった。当初，担当した教員５名は，それぞれ調査票調査，インターネット調査，聞き取り調査などを中心に授業を行った。

私の調査演習は，全体テーマは変わったものの，当初から聞き取り調査を中心にした通年のゼミで，今年で７冊目の調査報告書を出した。報告書は次年度はじめに，学生からインフォーマント(以下調査対象者)に渡すようにしている。特に学部学生の調査は，「やりっぱなし」になりがちである。そうならないために，調査対象者に報告書を渡して感謝の意を表すことは大切である。

調査の全体テーマは，最初の３年間「女と男のライフストーリーをさぐる」に，その後は「先輩に聞く私の仕事・働き方」に設定した。学生個人あるいはグループ（３人まで）によっては，そこからさらにテーマを絞るものもいる。春学期は，社会調査の概論や聞き取り調査についての講義，ワーク，発表とフィードバックなどを行い，夏休み前に調査計画書（調査目的や質問票などを含む）を提出させる。調査の依頼や交渉などは主に学生が行い，夏休み中に地元などで本調査を行う。調査対象者が見つからない場合は，黒木ゼミの OB，OG を紹介する。６年前にゼミの卒業一期生が始めた卒業生と現役生の年末コンパ（たてこん）は，重要な出会いの機会にもなっている。

秋学期は，本調査のテープ起こし原稿を，ゼミでのフィードバックを経て刈り取り作業を行う。そして最終報告書を仕上げる前は必ず，調査対象者に原稿を届けて目をとおしてもらう。改めてこれまでの７冊の調査報告書を読むと，当時の学生の関心やジェンダー規範を反映した思い込み（ジェンダー観）も見られる。報告書は調査対象者の記録であるだけでなく，学生の記録でもある。

学生の学び――2004～2010年の調査報告書から

７年間の調査報告書には，全体テーマである「女と男のライフコースをさぐる」「先輩に聞く私の仕事・働き方」に関連して，就職と結婚のどちらも学生たちの直近の関心事として報告書にあらわれている。聞き取りの調査対象者は，学生の家族や親戚，同級生，高校時代の教師，バイト先やゼミやクラブの先輩など，19歳から85歳までの男女である。女子学生に限らず男子学生も，調査対象者に女性を選ぶ傾向が見られるが，ジェンダーと関係あるのだろうか。

調査は夏休み中に，相手の自宅や職場，公園，喫茶店，大学の教室やサテライト教室などを使って行った。また，費用がかからないので大阪や京

都の公共施設の片隅を使ったこともある。調査場所は，レコーダーの録音が妨げられない場所を考慮する必要がある。

調査時間は１時間をめやすにしているが，学生のなかには用意した質問をするだけで，それ以上つっこんだ質問ができず，はやばやと20分ほどで終わる者もいる。後述するように，聞き取り調査ではコミュニケーション力と調査対象者との信頼関係（ラポール）がデータの質に影響を及ぼす。つぎに，当時の報告書のなかから学生がどのような学びが見られるか，いくつか紹介しよう。なかには，「仕事か家庭か」というジェンダー規範を二律背反的にとらえた仮説をもとに調査した結果，現実はもっと多様であったという気づきが見られる。

1）「Ａさんのライフコースをさぐる」より

ある女子学生は，中断再就職型（結婚後退職し，子育てが一段落して再就職）のライフコースをたどったＡさん（女性 40代後半）に，結婚観と仕事観の聞き取り調査を行い，最後につぎのように述べている。

> Ａさんに人生を振り返ってどう思うか聞いたところ，迷わず「不満を持った事はありません。今の人生は今の人生で幸せだと思う」と答えた。結婚する気はなかったけど，結婚したことも，子供を生んだことも，今はそれでよかったと思えると，Ａさんは言った。Ａさんのような女性は私から見れば特異な気がした。仕事が好きで，仕事を一生していきたいと思っていた女性が，それに反して結婚をし，子供を産み，女の役割を担っていきる。今現代の女性には，きっとこういう人生でもよかったと思う事はできないのではないだろうか。結婚することで人生を無駄にしてしまった，と思う女性はこの世に多くいるかもしれない。しかし，逆にＡさんのようにこんな人生もあったのだと思える女性もいると思う。結婚平均年齢の上昇，それに伴っての少子化，自己優先的志向の強い女性が増えてきている中で，今回のＡさんの話は

とても参考になった。

聞き取り調査をしたこの女性は，現在育児休暇を終えて仕事に復帰したワーキングマザーである。現在の彼女が学生時代の自分のレポートを読み返したら，どう言うだろう，それを聞いてみるのも興味深い。

2)「Bさんのライフコースをさぐる」より

ベストセラー・エッセイ，酒井順子(2003)の『負け犬の遠吠え』によって，30代以上，未婚，子なしの女性が「負け犬」と呼ばれて話題になった時期がある。ある女子学生は，大正生まれの女性Bさん(女性 85歳)のライフストーリーの聞き取り調査を行い，「一生シングルは不幸なことか」また「それを本人はどうとらえているか」という問いを設定した。そして調査の結論として次のように述べている。

> 今回の調査ではっきりわかったことは，Bさんは自分が独身ということに不満はなく，結婚すればよかったという後悔はないということだ。過去を振り返りながら話すBさんは，その一つ一つの出来事に自信をもって語ってくれた。また自分の人生に満足しているが，結婚に対してそれはそれでよいことだと肯定している。彼女は独身こそが最高の生きかたなどと主張しているわけではない。(中略)　今回の調査を行って，女性が一生独身であることは，その人にとって妥協なく満足する道を選んできたということのように思えた。

3)「Cさんに聞く私の仕事・働き方」より

内定をもらった3つ企業のうち一社に決めていたゼミの先輩Cさん(女性　20代)に，二人の男子学生が「仕事を選ぶ時，どんな基準か」を中心に，聞き取り調査した。当時の就職状況は決してよくないものの，学生側にまだ余裕が見られる内容である。就職活動をする際に，広く「他の職種に目

をむける」という当たり前のことでも，人に言われるのではなく，自前のデータで導きだした結論が，学生にとって意味がある。

> 自分の就きたい職種だけじゃなく，他の職種の面接を受けてより自分に合っている職場を選んでみるのも一つの手だなと思った。仕事選びを考える際，どうしても金銭面や労働時間などを考えがちだが，働きやすい職場や自分らしさの出せる環境など，仕事を選択する基準に置くことも大切だと思った。

4）「Dさんに聞く私の仕事・働き方」より

ある男子学生は，仕事に就いて3年目のゼミの先輩Dさん（女性 20代）に，「女性の就職活動の苦労」について聞き取りを行い，仮説を明らかにしようとした。Dさんは，大学3年秋から就活をはじめて約一年，30回以上の会社面接をうけてクリスマス前に内定を得たが，就活中に女性という理由で差別的な経験もしたという。当時，大学を卒業した人の三割が三年以内にやめると言われていたが，彼女は「あの（就活）辛さがあるから，三年目になりましたが，まだ会社をやめていない」と語っている。このDさんの調査から学生は，就職氷河期にあって女性の雇用環境は男性よりも厳しいだろうという推測（仮説）を実際に確認した，と述べている

> 女性の就職活動の苦労とは何か，企業の認識する女性像を一つの例として今回は確認することができた。昔から日本にあった「男性は仕事，女性は家庭」という固定観念や企業の求めている雇用条件と個々の求職者の状況がミスマッチなどの理由によって，日本の就職活動や就職現場で男性よりも女性の方が多様な側面で苦労することが推測できたのである。

5）その他の学び

学生の学びは，聞き取り調査結果だけではなく，調査中にも見られる。その一つが，聞き取り調査と他の調査との違いに気づいたことである。この学生は家族の一人を調査したが，信頼関係があったことと時間的理由で，電話インタビューを実施した。以下は報告書の最後に書いた反省である。

> 今回僕は対面でのインタビューはせず，電話で質問しました。そこで，対面インタビューと電話インタビューの違いについて述べたいと思います。まず電話だとその人のしぐさや表情がわかりません。それに質問だけで的確に答えようとするため，答えも非常に簡潔になるような気がしました。それはレポートにまとめる時は便利ですけれど，インタビュー自体の質という点で，やはり対面よりも劣ると思います。ほかの学生の対面インタビューの答えを見ていると，非常に長い答えが帰ってきているように思いました。……対面だと質問には直接関係のない話まで，きかせてもらえることもあったりして，より深く相手のことを知るには，電話より対面にすべきだと思います。

この男子学生が指摘するように，聞き取り調査が質問票調査などと異なるのは，非言語行動の読み取りが情報収集に大きく関わることである。聞き取り調査の情報源は，書かれた文字ではなく生きた人間にある。この読み取りが苦手な学生もいるが，生きた人間相手のデータ収集は，調査でなくても日常生活に必要なコミュニケーションスキルの一つである。調査初心者には難しいことではあるが，テープレコーダーに頼らず相手をよく見て話を聞き，フィールド・ノートをとるように指導する。その点に難しさを感じる学生には，グループ単位の聞き取り調査という選択肢もある。そこでは，質問する人，フィールド・ノートをとる人，レコーダー担当を分担できるというメリットはあるものの，グループで全行程をこなす難しさもある。

電話による聞き取り(telephone interview)は，一定の条件のもとで，対面調査(face-to-face interview)に代わるものとして，使われてきた(Nachmias & Nachmias 1981：202)。今年のゼミ生のなかには，海外で仕事をする親戚の一人に，「仕事・働き方」についてパソコンメールで調査を行ったものもいる。今後もゼミでは，対面以外の方法の長所と短所を見極めた上で，使っていくことになるだろう。

その一方で，信頼関係があることで対象者と同一化しすぎるという，「オーバーラポール」の問題がある(佐藤 1992：45)。バイト先の上司に聞き取り調査を行った学生は，この問題を次のように指摘している。

> インタビュー調査をするに当って，ラポールの加減は重要なことだと感じた。自分はオーバーラポール気味だったので，聞いて良いことと悪いことの区別がつき過ぎ，深く聞いたほうがよいという答えでも聞けずにいた。難しいかもしれないが，次のインタビュー調査をする時は全く会ったことがない人から，ある程度信頼関係を築いて調査に協力してもらったほうがいいのかもしれない，と思った。

相互作用の記録としての聞き取り調査報告書

非言語行動を読み取る力と調査対象者との信頼関係は，聞き取り調査でデータの質に影響を及ぼすものである。聞き取り調査では，「何をしゃべったか」だけではなく「どのようにしゃべったか」という，その人にとっての意味をさぐることが重要だからである(佐藤 1997：53-55)。学生たちの報告書は，調査対象者の「客観的」データというよりも，その時の学生たちが見て，聞いた対象者の経験であり，調査者との相互作用によって生み出された記録と読むことができる。

言うまでもなく，学びは本調査の結果だけにあるのではなく，調査前の準備から調査後のデータ処理と分析まで全行程にある。そして調査は報告

書を書いて終わるのではなく，それを調査対象者に見てもらうことまで含まれる。このような聞き取り調査が，学生にとって一年後の就職活動やその後の社会生活に影響するかどうか，追跡調査をするのも興味深いだろう。

注

（1） アメリカでは1980年代以来、フェミニスト調査方法と認識論をめぐってさまざまな議論がなされてきたが、初期の議論の中心は実証主義への批判である。詳しくは、拙稿「『女性の経験』をいかに語ることができるか――フェミニスト調査研究のディレンマ」『人間文化研究』１号参照。

参考文献

川橋範子　黒木雅子　2004「フェミニスト・エスノグラフィー――『女性の経験』をいかに語るか」『混在するめぐみ――ポストコロニアル時代の宗教とフェミニズム』人文書院。

黒木雅子　1986　「日米の文化比較からみる日系アメリカ人の性役割」『女性学年報』7：73-82。

――――. 1999「『女性の経験』をいかに語ることができるか――フェミニスト調査研究のディレンマ」『人間文化研究』第一号。

Nachmias, David & Chava Nachmias, 1981. Research Methods in the Social Sciences, 2nd edition. NY: St. Martin's Press.

佐藤郁哉　1992『フィールドワーク――書を持って街に出よう』新曜社。